

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 27 年 5 月 25 日現在

機関番号：32665

研究種目：挑戦的萌芽研究

研究期間：2012～2014

課題番号：24652051

研究課題名(和文) 東アジアにおける「文学 文化」の「闇」ルートと運動の力学をめぐる研究

研究課題名(英文) 'Shadow' Routes of Literature and Culture and the Politics of Activism in East Asia

研究代表者

高 榮蘭 (KO, Young-ran)

日本大学・文理学部・准教授

研究者番号：30579107

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 2,700,000円

研究成果の概要(和文)：東アジアにおける「文学 文化」の「闇」ルートと運動の力学をめぐる研究 と題した本研究では、帝国日本の解体以後、軍事独裁政権下にあった韓国の民主化運動に対し、日本の「文学 文化」が大きな関わりを持っていたことに注目した。とりわけ、「文学 文化」的「交流」に関しては、軍事独裁政権によって公式的には輸入が禁じられた、「民主化支援」に関わる書物・人・資本の移動が盛んに行われていたことが明らかにされたことはない。「亡命」「密航」ルートと交錯していた、文化の「闇」ルートを浮上させ、国交「断絶/正常化」という神話に囚われていた、日韓の近現代「文学 文化」研究に新たな論点を提起するための土台作りができた。

研究成果の概要(英文)：This paper, titled “'Shadow' Routes of Literature and Culture and the Politics of Activism in East Asia,” draws attention to the significant involvement of Japanese literature and culture in democratization movements in South Korea under the military dictatorships following its release from the Japanese Empire. In particular, with regard to literary or cultural exchange, the vigorous movement (despite official bans by the authoritarian regimes) of “pro-democratization” books, people, and capital has not been elucidated previously. I highlight the “shadow” routes of culture that functioned together with “smuggling” and “refugee” routes, and create a basis for raising new questions in the study of Japanese-Korean modern literature and culture, which has been caught in a narrative that emphasizes the “rupture” and subsequent “normalization” of diplomatic relations.

研究分野：日本近代文学

キーワード：検閲 日韓国交正常化 ベトナム戦争 在日文学 メディア 文化運動 情報統制 翻訳

1. 研究開始当初の背景

これまで、日本の近現代における「思想・人・書物・制度」の移動が引き起こす、接触や衝突が「文学 文化」の変容にいかに関わっていたのかについて研究してきた。2010年から2011年まで、研究活動スタート支援(研究課題番号:22820061)「帝国日本における出版市場の再編と合法・非合法商品の資本化に関する研究」に基づいて行った研究は、植民地と東京を繋ぐ検閲システムおよび植民地における資本主義的流通システムが本格的に起動し始めた1930年代に焦点を当てたものである。この研究は、2010年6月に藤原書店から刊行された拙著『戦後というイデオロギー 歴史/記憶/文化』で詳論した、日本人と朝鮮人による連帯・抵抗の言説に関する研究と補完関係にあるものである。これらの研究を通して、一九四五年以前の帝国日本の領土内において、日本語・朝鮮語の書物や書き手の移動は、民族別・言語別の境界を侵犯する形で行われたものであり、そこには常に権力との攻防が刻まれていたことがわかった。とりわけ、権力による暴力的な「非合法」という烙印が、単純な抑圧の手段ではなく、抵抗の手段にもなりうること、しかも、それが抵抗のための資金を獲得するための商品になりえたことがわかった。資料の横断や発表の場の横断を通して見えてきたのが今回のテーマである。すなわち、1945年以後、帝国日本は解体され、東アジアは米ソによって再編されるが、その過程で、旧植民地であった韓国と日本の間には「文学 文化」をめぐる様々な闇ルートが出来上がり、そこには韓国の軍事独裁政権への抵抗をめぐる、「人・書物・資本」の交錯が介在していたことに気付いたのである。

2. 研究の目的

(1)「闇」ルートという新しい概念から見える可能性について考えたい。

2010年から2011年の間に、スタートアップ支援の課題を通して、日本帝国による「非

合法」という烙印が、抵抗する側にとっては、抵抗の「資本」を得るための「商品」になりえること、しかも、それが、帝国日本の出版資本や検閲システムと同じルートを確保し、「表」を支える「裏」として機能していたことがわかった。今回は、帝国解体以後、帝国の亡霊ともいえる、韓国の軍事独裁政権によって「非合法」という烙印が押された、「日本」からの「人・書物・資本(民主化のための秘密資金)」が、密航・亡命などと交錯しながらどのように動き、韓国と日本の「文学 文化」にどのような変容を齎したのかについて注目する。「闇」ルートという概念を見出すことによって、東アジアの「文化 文学」の動きをとらえる新しい視点の獲得が出来ると考えている。

(2)「文学 文化」運動の「非合法性」の歴史について考えたい。

冷戦崩壊の前、とりわけ韓国で軍事独裁政権が長期に渡って続いていた時期、日本での支援活動の当事者は、韓国への入国が禁じられ、逆に韓国での活動家は密航や亡命以外の方法では、境界の外側には出られなかった。お互いに連帯していながらも、お互いのことが知らない状況に置かれていたのである。その「知らなさ」は、現在の研究においても続いている。資料の掘り起しと分析が必要である。また、両方の文化現象を同時にとらえるワークショップを積極的に開き、英語・日本語・韓国語など、多言語で発表をしていくことも必要である。また、運動の当事者がまだ存命中であることを考えると、その運動の当事者とともに対話をしていくことは、急がなければならないと考えている。このような研究を進めることによって、公式的なものとして認定されたもの、主に著名な知識人が書いた「資料 言葉」だけに自閉しやすい、研究の領土性自体をとらえなおす契機を見出すことが出来ると期待している。

3. 研究の方法

具体的な研究の方向性としては、(1)新しい研究をスタートさせるための研究資料の構築(資料の分析・調査・研究を含む)を試みる。特に、1960年代から1980年代に、日本語で出された韓国の民主化運動の支援を目的とする書物、チラシ、講演

会の記録、運動グループの記録などの資料を収集し、データの入力とデータベースの作成に着手する。(2) 韓国民主体化運動に関する日本語の書物、日本語文学の韓国語を媒介とする流通、そして検閲をめぐる共同研究との連携を試みる。本研究資金では、おもに1945年から1980年代における動きに焦点を当てる予定であるが、帝国日本とGHQ占領に関わる「検閲」の問題については、研究分担者として参加している基盤C「検閲」と文学言説の統制をめぐる超域的な文化研究(研究代表者: 紅野謙介)と連携を取りながら進めていきたい。(3) 国際ワークショップを企画し、複数の言語による領域横断的な成果の公表を試みたい。このような作業を通して、単なる個人研究の進展に留まらない、国内外の関連研究との繋がりを確保することが出来るだろう。その過程で、他の言語・専門の研究者からの専門的な知識提供が必要なのは言うまでもない。また、資料の調査に関しては、日本・韓国・米国の大学院生からの研究補助を受けることになるだろう。

4. 研究成果

(1) 2012年度

帝国日本の解体以後、軍事独裁政権下にあった韓国の民主化運動に対し、日本の「文学文化」が大きな関わりを持っていたことに注目した。2012年度は、以下の三つの点に重点を置いて研究を進めた。

新しい研究をスタートさせるための研究資料の構築(資料の調査・分析を含む)。東京外大の金ウネさんと共に、返還前の沖縄・ソウル・東京での文化運動に注目し、韓国・沖縄・東京への書物の流通ルートと文化(言葉)の移動にかかわる資料を集めた。この作業は2014年度まで続けた。

韓国・アメリカにおける文化運動・書物の移動・検閲をめぐる共同研究の基盤作りをした。ワシントン大学のE・Mack教授、韓国

成均館大学の千政煥教授と、2013年と2014年度に行う公開研究会について議論を重ねてきている。日韓の検閲研究者と日韓共同出版の準備を進めた。東アジアの革命と文化の流通について、ソウル大学日本研究所・ロンドン大学のNaoko Shimizu・オスロ大学のとの共同研究もスタートさせた。

国際ワークショップを企画・開催し、複数言語による領域横断的な成果の公表を試みた。韓国東亜大学石堂学術院文化コンテンツ研究所との共催で「冷戦感覚と情念の共同体」、現代思想編集者である押川淳さんをお招きし、1960年代から2000年代までの出版企画の変容と言葉の移動に関するお話しをうかがった。また、シカゴ大学、プリンストン大学、早稲田大学の研究者との「批評の現在」という共同研究の成果は、アメリカの出版社が刊行される予定である。韓国の軍事独裁政権下における、文化の闇ルートの問題を、他の地域の研究者とのネットワークを構築することによって、より複合的な側面から捉えるための基盤作りができた一年だったと思う。

(2) 2013年度

東アジアにおける「文学文化」の「闇」ルートの問題を考える上で、サブ・カルチャーの問題は避けて通れない。この問題を書物・人・移動の問題に節合させる企画も合わせて行っている。ワシントン大学のE・Mack、韓国成均館大学の千政煥、大妻女子大学の五味淵典嗣らとともに、11月8日~9日、国際会議「下からの綴り方、他者の文学」(韓国東国大学)という国際会議を企画・発表した。6070研究会を立ち上げ、5回の研究会を開いた。例えば、9月29日には、Christopher Ahn「Suzuki, Sartre, Fanon: Language and Identity in the Kim Hui-ro Trial」; 趙基

銀「民団系在日朝鮮人の韓国民主化運動」、2014年2月21日には韓国から金元氏をお招きし、「朴正熙時代の韓国における大衆の記憶と忘却」という発表と木下ちがや・鳥羽耕史・中谷いずみのコメントを伺いながら議論した。サブ・カルチャーに関しては、10月18日ワークショップ「欲望をめぐるポリティックス」(花園大学)、12月3日には韓国から林泰勲氏をお招きし、「陳腐な世界を宇宙時の視点から見つめる」というタイトルで韓国の独裁政権下のSF問題について伺った。

韓国成均館大学の李惠鈴・韓基亨、ソウル大学の鄭根埴、日本大学の紅野謙介氏とともに、検閲に関する単行本の同時出版を計画している。

(3) 2014年

韓国・アメリカ・ロシア・中国における文化運動・書物の移動・検閲をめぐる共同研究の基盤作りをした。ワシントン大学のE・Mack、韓国成均館大学の千政煥、大妻女子大学の五味淵典嗣らと、アメリカのワシントン大学で、2014年10月2~3日にかけて書物や知識の移動に関するワークショップを主宰した。次回は2015年9月18日から東京での開催を予定している。日韓の検閲研究者と『検閲の帝国』(新曜社)を出版した。2015年度には韓国語版の出版が予定されている。2013年度から東アジアの革命と文化の流通について、ソウル大学日本研究所・ロンドン大学のNaoko Shimizu・オスロ大学の

と共同研究を行っているが、2014年7月11日にソウル大学で国際会議を開いた。これまでの研究成果は2016年度にソウルで単行本化される予定である。2013年に北京で行った日中の研究者による共同研

究の成果が、中国の汪暉・王中忱編『區域』に特集枠で掲載された。日本語版は2015年に刊行される予定である。

国際ワークショップを企画・開催し、複数言語による領域横断的な成果の公表を試みた。2013年度から6070研究会を立ち上げているが、2014年度には3回の公開ワークショップを行った。1回目は「沖縄「自立」の文化的再構成を問う」というタイトルで、林慶花「日本『復帰』前後における沖縄の国際連帯運動と朝鮮半島」徳田匡「兵士たちの武装「放棄」 反戦兵士たちの沖縄」金閻愛「戯曲『人類館』における復帰運動の痕跡 上演活動とことばの交錯から」の報告、佐藤泉戸邊秀明のコメントという構成であった。2回目はChelsea Szendi Schieder「ゲバルトローザ：日本における新左翼、暴力、ジェンダー」の報告、小田原琳のコメント。3回目は「「連帯」の分断、その記憶を如何に歴史化するか」という企画を趙基銀(東京外国語大学大学院)「民団系在日朝鮮人の韓国民主化運動」、Chris H. Park「From Tokyo to New York」の発表で構成した。

(4) 研究結果の特徴と意義：

第2次世界大戦以後の「文学 文化」の闇ルートおよび運動の力学については、アメリカ、ヨーロッパ、日本、韓国、台湾、中国、ベトナムをめぐる研究との連携が大切である。大きな研究交流のレベルでは見落とされやすい、明確なテーマをめぐる専門的な深い議論、そして、多言語による出版、学会誌への掲載などを通して、異なる文脈を生きる研究との対話の可能性を提示できたと思う。また、本研究の成果を単行本化するための出版計画が日本と韓国で進められている。まず、日本

語版は 2015 年度末あるいは 2016 年度はじめに刊行される予定である。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

〔雑誌論文〕(計 5 件)

高榮蘭、「「平民」行商たちの情報戦 革命時代における日本語メディアの抗争」『JunCture 超域的日本文化研究』06号、名古屋大学「アジアの中の日本文化」研究センター、2015年3月、pp. 14 - 27、査読無

高榮蘭、“The Concept of “Empire” and the Russian Revolution Common Revolution: From the Crossroads of Transmission and Reception”, *CONCEPTS AND CONTEXTS IN EAST ASIA* 3,

December 2014, Korea : Hallym Academy of Sciences pp. 131 - 148、査読有、韓国

高榮蘭、「グローバルズムが呼び覚ました「ゾンビ」に遭遇した時 ベトナム戦争・日韓国交正常化・漢字文化圏の交錯を手掛かりに(中国語訳)」汪暉・王中忱編『区域』VOL.3、社会科学文献出版社、2014年11月、pp. 330 - 337、査読無、中国

高榮蘭、「移動する検閲空間と拡散する朝鮮語 一九二八年「三・一五」と一九二九年「四・一六」の間から」『Intelligence』、20世紀メディア研究所、pp. 45 - 55、2014年3月、査読有

高榮蘭、「朝鮮/韓国戦争 あるいは 分裂/分断 - 記憶の承認をめぐって(韓国語)」成均館大学東アジア学術院『大東文化研究』79号、pp. 63 - 91、2012年9月、査読有、韓国

〔学会発表〕(計 14 件)

高榮蘭、*Korean War Coverage and the Illusion of a “Neutral Japan” : The Time of Kim Tal-su, Hō Nam-gi, and Chang Hyōk-ju* , “Empire and Language:

Translingual Inter-Asia” , Cosponsored by Education and Innovation in China (ERIC), and Franklin Humanities Institute (FHI) ,March 12th 2015 , at Duke Kunshan University、中国

高榮蘭、「グローバルズムと漢字文化圏をめぐる文化政治 「ベトナム戦争」×「日韓国交正常化」という記憶装置から」高麗大学日本研究センターHK事業団、於高麗大学、2014年12月22日、韓国

高榮蘭、*The Korean War and Disputed Memories: Kim Dal-su’s Nihon no fuyu and the 1955 System* , “Periodical Publication in Asia and Beyond” , Cosponsored by University of Washington , Materiality of Literature Working Group , October 2nd 2014, at Washington University 、米国

高榮蘭、「「平民」行商たちの情報戦 革命時代における日本語メディアの抗争」、文明研究国際シンポジウム「1905年ロシア革命と東アジアをめぐる言説形成」、ソウル大学校人文学研究院HK文明研究事業団主催、於ソウル大学校、2014年7月11日、韓国

高榮蘭、*Representations of Russian Revolution and the Socialist Fashion – as seen in NAPF’s Journal*, Senki ; Russian and Japanese Radicals View Each Other: 1880s to 1920s (Organizer: Vladimir Tikhonov, Oslo University) ,THE EIGHTEENTH ASIAN STUDIES CONFERENCE JAPAN (ASCJ 2014),於上智大学、2014年6月21日

高榮蘭、「翻訳 帝国 とロシア革命：概念、発信と受信の交叉路から」、2014年翰林大学校翰林科学院国際学術大会「東アジア 帝国 の概念史」、翰林科学院主催、於翰林大学校、2014年6月13日、韓国

高榮蘭、「ベトナム戦争と「普通市民」の時代 1965と1968が作り出す「加害/被害」の遠近法と表象」、国際会議「下からの綴り方、他者の文学」、成均館大学東アジア

学術院人文韓国研究所、東国大学校文科学術院共催、於東国大学校、2013年11月9日、韓国

高榮蘭、「文学空間の住民とは誰か 2013・日本（語）の近現代文学から」高麗大学校文科大学・日本大学文理学部国際学術会議「東アジア：持続力ある対話へ」、於日本大学文理学部、2013年9月28日

高榮蘭、「グローバリズムが呼び覚ました「ゾンビ」に遭遇した時 ベトナム戦争・日韓国交正常化・漢字文化圏の交錯を手掛かりに」、国際会議「19世紀以降の変容する東アジアの秩序」、清華大学高等研究院人文与社会社会科学高等研究所主催、於清華大学 北京郵電會議センター（中国語名：北京郵電會議中心）2013年9月1日、中国

高榮蘭、「移動する検閲帝国と拡散する朝鮮/語 『戦旗』『文芸戦線』『改造』『中央公論』の流通網から」、国際シンポジウム「日本と東アジアの検閲史再考」、早稲田大学20世紀メディア研究所主催、於早稲田大学、2013年7月20日

高榮蘭、「グローバリズムが呼び覚ました「ゾンビ」に遭遇した時 漢字文化圏構想とベトナム戦争言説の交錯を手掛かりに」第75回日本比較文学学会全国大会、シンポジウム「漢字文化圏における文学の近代 漢字・漢語・漢詩文は如何なる役割を果たしたのか」、於名古屋大学、2013年6月16日

高榮蘭、「グローバル戦略と「在日朝鮮人/ニューカマー」作家をめぐる文化政治」国際学術会議「東アジア古典学/文化研究の可能性と難関 韓国文化の固有性と東アジア的な共同性」、成均館大学 東アジア学術院 東アジア学科・G T 10 事業団主催、於成均館大学、2013年4月27日、韓国

高榮蘭、「情動の枠組み ベトナム/レイテ戦記の磁場から」「日本近現代思想史を書きなおす」・第6回国際会議「戦後日本と

いうアムネジア」、於早稲田大学、2012年12月21日

高榮蘭、「2012・リービ英雄という出来事」、ワークショップ「作家は越境する アメリカ・日本・中国」日本大学人文科学研究部総合研究プロジェクト「東アジアにおける文化的統制と抵抗 の錯綜をめぐる総合的研究」主催、於日本大学文理学部、2012年4月21日

【図書】(計 4 件)

紅野謙介・高榮蘭・鄭根埴・韓基亨・李惠鈴編、『検閲の帝国 文化の統制と再生産』新曜社、2014年8月

高榮蘭、「屋上、スラムの惑星に穴をあけるためにー日本語小説との想像力の連鎖を試みる（韓国語）」、金マンソク・他編『屋上の政治』ガルムリ、pp. 113 - 133、2014年3月、韓国

高榮蘭、「多民族国家日本」、苅部直・他編『岩波講座 日本の思想』第三巻、岩波書店、pp. 217 - 246、2014年2月

高榮蘭、『戦後というイデオロギー 日本の戦後をめぐる記憶のノイズ（韓国語）」、金美晶訳、現実文化研究、2013年7月、全367頁、韓国

6. 研究組織

(1) 研究代表者

高 榮蘭 (KO, Young-ran)
日本大学・文理学部・准教授
研究者番号：30579107